小さな巨人

オフサイドマン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ぜんそく持ち少年・神崎　蹴司は幼馴染たちが楽しそうにボールを蹴っている姿を遠目にみつつ１人でボールを隠れて蹴っていた。そんなある日、彼は中学の試合に出たところから彼のサッカーは始まった。

これは遅咲きの１人のサッカー少年の物語。

※１）オリ主のモデルはＤＡＹＳの成神蹴治です。身長は１６０前半と違います。

２）タイトル（Ｒｉｇｈｔ　Ｈｅｒｅ　Ｒｉｇｈｔ　Ｎｏｗ～今まさに～）とあらすじを書き直しました。

目　次

プロローグ　――――――――――　1
第1節　鳥かごから解き放たれる。　8
第2節　まだこれからも　――――――　22

プロローグ

埼玉の大浦東にある寺院で暮らす神崎蹴司には幼い頃から一緒に長い時間を過ごす幼馴染たち、一条龍・青梅優希・青梅優人がいた。

そんな彼らと同じ時間を過ごすことが多い蹴司だったが、彼らと一緒にいれない場所があった。サッカーのピッチ、蹴司は喘息持ちだったから激しい運動に混ざれなかったのだ。

いつも遠目に幼馴染たちが楽しそうにボールを蹴る姿がうらやましかった蹴司。自分もいつかあんな広く緑の芝に覆われたグラウンドにみんなと一緒に立ちたいと思う蹴司は1人、寺院の裏でボールを内緒で蹴る日々を送っていたのだった。

今日、僕は龍くん、優人くん、優希ちゃんのサッカーチームが勝てば優勝で全国大会に出れるという大会を今日も見に来ていた。今大会は加賀谷の桜庭くんを倒してから龍くんの調子はうなぎのぼり、どこが相手でも負ける気がしなかった。そして、今日の相手ＧＫの渡辺くんに対してなかなかゴールを奪えない中で奪った1点はすごいの一言だった。

「龍ちゃん！　これでおじさんとおばさん観に来てくれるね！」
「きっとビックリするよ！　うちの龍ってばこんなにすごかったのね！　なんて」
優人くんと優希ちゃんが言うようにきっと全国大会という大舞台なら龍くんのおばさんが観に来てくれるはずだった。
「龍くんのプレー凄かったよ！　何手もプレーあるから見てて楽しい！」
「そうなんだよな。蹴司が言うようイメージ沸いてそれをそのままできる自分がいるからさ」
龍ちゃんの最近のプレーは凄かった。得点を奪うのもそうだが、周りも使う。完全に試合を支配しているようだった。
どんどんすごくなる龍くんに僕たちは手の届かないところに行っちゃう気がした。それを言った優希ちゃんに龍くんはこれからもずっと変わらないよと言ってくれたことがすごくうれしかった。
そう言って僕の先を行く3人は階段を上り切って道に出ようと優人くんがした時だった。
――――ブォン!!
僕はまだ階段をあと1段の残してたから見えなかったけど突然龍くんと優人くん、そして優希ちゃんが僕に向かって落ちてきた。

「!?」

この時の僕は弱く小さな体で必死に受け止めようとした。咄嗟で優希ちゃんは横から落ちそうだったから僕は左手で落ちてくる反動を押し殺すように、押し返した。でも、その分勢いを受けて細い右腕から龍くんと優人くんは零れ落ちてしまった。

僕は運がよく手すりの柱にぶつかって止められる格好で下まで落ちなかったけど、脇がすごく痛くて動けなかった。

――いやぁぁぁぁ

僕はこの時優希ちゃんの悲鳴の中で、ポケットに入れていた何かあった時にと、爺ちゃんに与えられていた携帯受信機のボタンを押した。

その後、雨の中すぐに近くにいたお姉ちゃんが迎えに来てくれて4人は病院へ救急搬送された。

僕たちのあたりまえの日々が一気に崩れていく。辛く悲しい日となってしまった。

あの大事故から1週間。僕は優人くんと同じ病棟の病室にいたけど、全くと会話という会話もしてなかった。優希ちゃんはかすり傷で済んだけど、僕はあばらにひびと手首を折った程度、優人くんは左腕を折った。でも、龍くんは全身を強く打って手術を受けて何とか命に別条はなかったけど、サッカーどころか普通の生活に戻れるかさえもわか

らなかった。

あの時、優人くんが道に飛び出したところを龍くんが引っ張って助けたけど、その勢いで龍くんと優人くんは階段から落ちたと聞いた。僕は階段の段差に気を付けて歩いていたので、なぜに階段から2人と巻き込まれた優希ちゃんが落ちたかがその時は分からなかったけど、咄嗟に動いた結果優希ちゃんは助かった。でも僕の残った細い右腕では龍くんと優人くんは支えきれず、こぼしてしまって二人は長い階段下へ……落ちてしまった。

その後、あまりの出来事に優希ちゃんは気を失いかけ誰の助けも入らない中で僕が持っていた携帯受信機を鳴らしたおかげで姉ちゃんが駆けつけて、救急車へと運ばれたのだった。

――もう少し……、遅れていたら、龍が。

僕の機転の利いた行動が功を奏したこともあって、龍くんはあの後すぐに手術には入れて助かったこと龍くんのお母さんからありがとうと言われた。けど、僕の中ではあの2人が腕の中からこぼれていき落ちていく光景が苦しくて胸が痛かった。

「優人！　ホントにそれいいの？」

僕の隣はカーテンで遮られているけど、声は筒抜けで優人くんと優希ちゃんのお母さんは龍くんのおかげで助かったのに、会わなくていいのかと聞くが、優人くんは会えな

いしか言えなかった。

その後、二人のお母さんが出て行ったあとに優希ちゃんが優人くんを連れて行こうとしたけど、結局本人の前で会えなかったみたいだった。

――――――……

その日の夕方、僕も龍くんに会えてなかったから意を決して病室の前へ行った。でも、僕は迷ってしまった。そんな時、通りかかった龍くんのお母さんと一緒に入った。

「りゅ、龍くん……」

龍くんは頭には包帯、顔や腕には傷はところどころ残り右足は包帯でぐるぐる巻きだった。

「蹴司！」

「う〝」

僕はその場で足元が崩れ、涙を左腕で拭いながら……

――――――ありがと〝う！　生きて〝てくれて！　ありがとう!!

僕は、まだ目の前に龍くんがいることが良かったと思うのだった。

その後日、優人くんも龍ちゃんの許へ行って話したことを聞いた時はホッとしたし、よく優人くんも頑張ったと思った。

それから優人くんが退院した後に僕も退院が許され、龍くんだけが病院での生活がし

ばらく続いた。龍くんは僕たちを気遣ってかあんまり病院に顔を出すなと自分たちの時間を大切にしてほしいことを思って言ってくれたのだった――――

あの事故から3年が過ぎようとした。季節は夏を迎え中学最後の夏休みを迎えていたころ、僕はいつもの儀式となった境内のお賽銭箱にお賽銭を入れて拝んでいた。

「しゅうじー。今日も昼から学校に行くんじゃろ」

「うん、みんなの手伝いに」

事故から2年と少しが経ったころ、龍くんは驚異の回復力からサッカーが出来るまでになりました。それも、しっかりとリハビリを頑張ったから。そんな龍くんを優希ちゃんがしっかりといつも横でサポートしてくれた。僕だったら、いざって時に弱い気がしたから優希ちゃんにお願いして、ただお賽銭を入れて拝むことぐらいしかできなかった。

「もうすぐ大事な試合が近づいているからさ！」

そして僕やみんなが通う大浦東中学は県南大会を勝ち上がって1週間後に控えた県大会に向けて練習に励んでいた。

最初はばらばらだったチームも日が経つにつれて関係もよくなり全員が同じ目標、高

円宮杯の本大会に向けて頑張っていた。中学卒業を機に親のいるインドネシアに行ってしまう龍くんがどこかのサッカーチームの目に留まって日本でサッカーが出来るように引き留めるために。

「熱すぎるのはあれだけど……、ボールを蹴るのには悪くないかな……」

僕は人気の少ない裏手のなぜか境内の方でいつものように自分の真上に高くボールを蹴りあげる、父さんが教えてくれた練習を、この場所で。

僕もかなり小さかったけど身長１６０前半まで来た。あとどれくらい伸びるかなと思い、力強くなったキックで上空高くボールを蹴りあげた時だった。

「え……？　蹴ちゃん」

この場所でサッカーボールを蹴っていたことを家族のだれにも教えてないのに、幼馴染の３人がその場にいた。僕がサッカーボールを蹴っているところを驚いた表情で―

第1節　鳥かごから解き放たれる。

　県大会初戦を迎える前日のことだった。
　蹴司の家の寺院の1室、机を介して蹴司と優希と優人、サッカー部のキャプテンの宮崎が向かいに座る蹴司の姉・夏と祖父・哲司にあるお願いをしていた。
「ダメ、絶対ダメ」
「そこを何とかお願い、夏さん」
　お願いとは蹴司をサッカー部の県大会の試合から出させてほしいとのことだった。
それを聞いた夏は頑なにダメと言い、また蹴司に怒った。
「蹴司、あんたなんで黙って隠れてやってたの」
「い、いや。僕は……」
「自分が喘息だってこと分かっているよね」
　それは蹴司だけでなくその場にいた優希たち3人にも言っていた。
「で、でも！　このままだと一条がインドネシアに！」
「宮崎くんだっけ？　周りに頼る前に自分たちでどうにかしたらどう？」
　そう厳しく問い詰める夏に蹴司は、そこまできつく言わないでよ。と言うが、本当の

ことだからとそっぽを向く。
「夏さん、本当に蹴ちゃんすごいです！　５日前から練習に――」
そう優人が、内緒でさきに練習に加わってい居たことを話そうとしたので両隣にいた優希と宮崎が口元を抑える。
「あんた、練習に加わったの？」
「うっ、うん……」
正直に答えた蹴司に夏はとんだ困ったものだと頭を抱える。
「で、でも！　姉ちゃん！　僕が出場する時間は多くて１０分ちょっと。それぐらいなら大丈夫だって練習でやったんだよ」
それを聞いてさらに表情が怖くなる蹴司の姉・夏に、優希たち3人は怒られるのかと思ったが、ため息がこぼれた。
「……。戦力として数えられているの？　蹴司は？」
そう宮崎に聞く夏に宮崎は入っていることを伝え、一度座っていた場所から下がって畳に頭を下げてお願いした。
「お願いします！　俺たちも必死に頑張っています！　でも、このまま可能性が低い厳しい状況を少しでも打開できるのに蹴司くんが必要なのです」
そう言った宮崎に続いて優希と優人も頭を下げてお願いした。それを見た夏は少し

の沈黙の後、隣でお茶をすする祖父・哲也に声を掛けた。
「爺ちゃん、ちょっとだけならいい。私も明日部活休ませてもらっていくからさ」
『!!』
　認めてくれたことを喜ぶ3人だったが、夏の咳払いで身が縮まる。
「で、どうなの、爺ちゃん？」
「やらせたらいいじゃないのか。別に」
「そういうことみたいだから、いいわよ」
　それを聞いてよしっと喜びを示す４人だったが、夏に条件を出される。
「まず1つ。出場は１０分以内！　それ以上はダメ！」
「はい！　そこは先制とも打ち合わせ済みです！」
　宮崎はすでに顧問の先生にも承知済みだと伝える。
「はい！　それと絶対交代枠は1枚以上を残してもらう状況で出ること。交代枠がラスト1枚で出すのは絶対ダメ。もし１０人でも戦う覚悟があるなら別に構わないけどね」
「気合見せるよ！　夏さん！」
「その条件なら呑んであげるわよ」
「！　ありがとう夏さん！」
　優希はありがとうと幼馴染の姉貴分に頭を下げた。

「それと――――」

――――龍ちゃんを引き留めてみせなよ！

△▼△▼

県大会１回戦。相手はクラブチームの麻倉キッカーズには絶対的守護神の渡辺健太がいた。その渡辺を中心とした堅守のチームに大浦東は後半２３分が過ぎようとした時だった――――

「止めて!!」

攻撃に転じていた大浦東だったが、カウンター攻撃から一気にピンチを迎える。全員が１点を追いつくために必死に攻めていたところを突かれた――

――――決まった――!!

――――大きな追加点が決まった!!

０―２。残り１０分を切りそうなところで痛恨の失点。相手の渡辺の調子を考えれば絶望にも見える失点だった。

「顔上げろ！　行くぞ!!」

龍はすぐにボールを貰ってリスタートとするように指示を出す。残り１０分で２点差。交代カードは１年生の諸星が奮闘した分に足が攣ったこともあって残り１枚の状況だった。選手交代がされた。

「ん？　小さい２６番……足の止まって来たうちを守備ライン狙いか」
相手の渡辺もすぐに大浦東の選手交代に気付いた。ピッチの前に立つのは蹴司だった。少し履きならした程度の真新しいスパイクのひもを締め直して、交代選手とハイタッチを交わして前線へ入った。
「２６番！　スピードあるタイプだぞ！　気を付けろよ！」
ＤＦ陣に指示を出す渡辺、それに頷く麻倉キッカーズのＤＦ陣たち。
「龍くん、僕頑張るから！」
「あぁ、頼むぜ」
さっそく龍からのリターンを受けてセンターサークルからリスタート。蹴司はすぐに宮崎に預けて前線へ走った。
「ここで２点差……厳しいな」
「諸星が抜けてパスの出し手が減った。前線に張る蹴ちゃんに渡れば――」
そう話す優希たち。それに、応援に来たアンナはいつも一緒に見ていた蹴司で大丈夫なのかと困惑した様子だった。それは近くにいた応援に来た小学校の頃のチームメイトで今はレッズのＪｒユースの立彦も。
「大丈夫。まだ蹴ちゃんが入ったことで可能性がある！」
ボールをしっかりと短くつないだ大浦東は左に開いて足元に要求した蹴司へパスを

送った。この時、蹴司の対面のＤＦについたのは守備面だけでなく攻撃でも１点を奪ったボランチの永野だった。

　この時、麻倉は慌てずにこの２点を守るべくしっかりと守備の陣形を整えた。

（非力なタイプ……やっぱり前線のＣＢとはやり合いたくないから避けたか……）

　ボランチの永野はいつパス・ドリブルが来てもいいように待ち構えた。

「蹴司!!」

　この時、龍がフォローに入ろうとした時だった。永野はパスを選択すると思った。しかし――――

「なっ!?」

　ドリブルで一気に蹴司は抜き去ったのだ。それを見て龍もポジションをエリアの方へ近づける。

「一条に入れさせるなよ!」

　そう指示が飛んだ時、蹴司は２枚にＳＢとＣＢの選手の二人から見たらここでパスだと思った。

「さらにドリブルで抜いた――!!」

「強引に突破した――!!」

　蹴司は一気に２枚も抜き去り、ペナルティーエリア内へ侵入。最後の砦、ＧＫ・渡辺

もすぐにコースを限定するように距離を近づけた。

（よし！　止められる!!）

渡辺はそう思った。

「蹴ちゃんがエリア内に入れば、勝つ確率の方が高い!!」

スタンドで見ていた優希が自信をもってそう言えるのも１週間前に見たトラップもそうだったが、やっていた環境からだった。ずっとやっていた場所がエリア内の大きさが境内の広さと同じ、ゴールの大きさが階段の段差と手すりの幅で調整されていたことを龍が気づいたのを聞いたからだった。

「止めてやる！」

渡辺はドリブルで突っかけてきた蹴司へ止めに身体を投げ出して入れようとした。この時、誰もが止められると思った。が、以外にも結果は大方の予想を反した。

「なっ!?　飛ん――！」

渡辺は蹴字が前に取れない位置へ出したことで一気にボールへ足を出した。でも、それは誘いだった。ギリギリのところにボールをさらして蹴司は一気にボールを足元に乗せて飛んだのだ。

――き、決まった～～!!

最後は無人のゴールに転がすだけだった。

「う……、うぉぉおお――――――！　1人で決めやがった！」
「3人抜き……、いや！　GKの渡辺も抜いて4人抜きだ！」
試合は残り6分で1点差。同点を射程圏内に戻した。

得点を決めた僕はすぐさまリスタートするためにゴールの中に入ったボールをもってセンターサークルへ運んだ。
「よくやった！　神崎！」
「蹴ちゃん！　すごいよ!!」
宮崎くんと優人くんがそう言ってくれて良かった。
「ナイス蹴司！　よくナベケンにも立ち向かえたな！」
そういってハイタッチを交わした龍くんと僕。
「ご、ごめん。シュ、シュート忘れてた」
僕はあの場面、とにかくゴール近くまで行って決めることだけしか考えてなかった。でも決まったし良かった。
「もう1点だ！　もう1点行くぞ!!」
そこから僕たちはまず同点を目指して必死にボールを追った。宮崎くんと優人くん

は試合前に得点だけを考えてくれって言ってくれた。僕はとにかく前線で待つだけだ。お願い、みんな。

そう思い自陣でボールをキープされたけど、体を張ったＤＦでボールを奪った。

「あと２分!!」

あと２分を切った時だった。相手のボールを敵陣で触れたが、転々とサイドラインに行った。

「大田！」

そこを途中で入った太田君がギリギリで残した。

「いけ！　神崎！」

一本のパスが僕に入った。相手はボールが出るものだと思って足が止まっていた。

「前向けるぞ！」

「仕掛ける前に止めろ！」

相手のＧＫの指示通り、前にドリブルで抜かれたことを警戒したのと、あの場面。パスも出せたことから潰せるときに潰すべきと判断したのか僕の持つだろうボールへスライディングを掛けてきた。

「くっ!?」

だけど、僕は反転をしながらボールを横にそらして前を向いた。

（やばいっ！）

僕はこのまま――――

「あっ」

後ろから足、じゃなくて手を掛けられて倒れそうになった。ファウルになる、と思ったけど僕の視界にパスを要求する仲間が見えた。

「宮崎くん！」

僕は倒れながらも右足を延ばして宮崎くんにパスをつないだ。アドバンテージが取られてプレーはそのまま続く。

僕は倒れながら宮崎くんのプレーを見届けた。選んだ選択肢は思い切ってシュート。その思いっきりが相手の手に当たったのが見えた。

――――ピィ!!

主審の笛が鳴って場所を指さした。いい位置でのＦＫだった。

「宮崎！」

「よくシュートに行った!!」

思い切って宮崎がシュートに行ったことで相手のハンドを誘った。それも絶好の位

置。
「宮崎！」
「大田！　良く残してくれた！」
　スタンドで見ていたアンナの祖父。ミルコ・コヴァッチはただの不運でなく、諦めずにボールを残した１１番の太田の動き、そして倒れながらもパスを送った蹴司の粘りから生まれたものだと思った。
「早く！　壁作れ!!」
　指示を出すＧＫの渡辺は、反省は後だとチームを支える。
「死守するぞ！」
　ＦＫの位置には宮崎と龍がいた。
「一条……決めてくれ」
　そう宮崎はＦＫを託して壁に入った。
　そしい、ボールをセットする前に龍が誰かを呼んだ。蹴司だった。
「（どうしたの龍くん？）」
「（蹴司、大丈夫か？）」
「（う、うん。大丈夫だよ。龍くん、お願いがあるんだけど……）」
「（何？）」

「（僕、左利きだしダミーになるから横に立っていてもいい？）」
本当はそういう意味でなくただあの日、スタンドで観た龍のＦＫをまじかで見たかっただけだった。蹴司は小さな声で聞くと、龍は親指を立てた。
それを見て前半ＦＫの位置にいた優人が離れた。
ＦＫの位置に右利きの龍と左利きの蹴司が立つことでどちらが蹴ることはＧＫの渡辺は分かった。
（でも、蹴るのは龍だ！）
――――ピィっ！
審判の笛が鳴った。龍はワンテンポ入れてから助走位置からボールへ向かい蹴った。
『あっ!?』
この時、壁はしっかりと飛んでコースを防ぐつもりで高く飛んだ。しかし、龍は読んでいたかのよう、その高く飛んだ壁の下を張りの糸を通すように流し込んだ！
「大浦東！　土壇場で!!　追いついた――!!」
龍の狙いをすましたＦＫは、相手の好ＧＫの渡辺を動かせないほどの精度だった。
０―２から残り１０分で何とか追いついた大浦東。これならいけると思った時だった。
「お、おい。大丈夫か!?　蹴司？」

龍が駆け寄って喜んでいた蹴司の息遣いがおかしいことにすぐさま気付いた。蹴司は発作じゃないから大丈夫だというが、優人と宮崎はちょっとでも異変が出たらピッチから出ることを約束していた。

「蹴ちゃん、よくやったよ。後は僕たちに任せて！」

「任せろ、神崎！　俺たちが勝つからゆっくりしておいてくれ！」

チームも１０人になる可能性があることは頭の中に交代枠１枚で入った時には入っていたので覚悟は決まった。

「あっ！　蹴ちゃんが!?」

スタンドにいた優希たちメンバーもピッチから戻らない蹴司に気付いた。それにいち早く気づいたのは蹴司の姉・夏はすでにスタンドから出ていた。

そこから大浦東は１０人で何とかしのぎ、ラストプレーでロングボールを前線に入れたが通らず、ここでホイッスルが鳴った。

「７０分で決着つかず、ＰＫ戦!!」

試合は決着つかず、ＰＫ戦にもつれこんだ。

ＰＫ戦は残酷だ。誰かが外すまで続ける決着方法だと気づいたのは龍くんの人生が

掛かった試合で気付かされた。

『うぉぉおお!!』

「どるあ――!!」

「いやったぁ!!」

自分たちが敗れたことによって――。

僕はこの時ほど、自分の病気を恨んだことはなかった。ピッチに居れば、最後の攻撃も得点機にできる自信があった。でも結局何もできず、ただスタンドからベンチで見守ることしか変わらなかった自分が――――、何より悔しかった……。

ここで、本大会への道は閉ざされ……。龍くんを連れて行くという目標は潰えた。

第2節　まだこれからも

あの日の試合の後だった。龍ちゃんはやっぱり日本に残りたいとおばさんに伝え、すでにインドネシアにいるおじさんにテレビ電話で自分の思いを伝え日本に残ることをお願いした。それにおじさんは応えてくれたみたいで、日本に残ることが決まった。

決まったらすぐに私たちの家に報告に来てくれた龍ちゃんは、すごく嬉しそうにこれからも一緒にいれると伝えてくれた。

「蹴ちゃんにも伝えに行こう!」

すごく悔しそうだったのと、後悔した表情を見せてたのも龍ちゃんも分かっていたから私たち3人は蹴ちゃんの家、青龍寺へとすぐに向かった。

「良かったね、龍ちゃん」

「ありがとう、夏さん」

出迎えてくれた夏さんだったけど、蹴ちゃんの姿がなかった。どこにいるか聞くと、あの裏の方にある蹴ちゃんの隠れ家だった。

「おーい。蹴――」

蹴ちゃんを呼んだ龍ちゃんだったけど、少し呼ぶのをやめた。

「こんな事……、ずっと一人でやってたのかよ」
今も1人ボールを高く蹴りあげてる蹴ちゃん。そしてすぐにトラップして階段に身体を向けてシュートを放つ練習を繰り返していた。
「今日ね、あの後一応病院に行ったのよ」
「だ、大丈夫でしたよね？」
「大丈夫よ、優希ちゃん。発作でも何でもなかったから。それで病院の後帰ってきたら私の作るカレーそっちのけで、ずっとあぁやって蹴っているの」
「ご飯も食べずに？」
「うん。よっぽど悔しかったみたい。もし負けることになっても最後までピッチに立っていたかったのよ」
それを聞いた私たちは、これまで小学校の時から今日の試合に出るまでの日々をスタンドで小学校のころまでだったら私たち3人を、中学の頃は龍ちゃんと優人をどれだけうらやましく悔しい気持ちで眺めていたのかが計り知れなかった。
「今日はありがとう。蹴司を……、あのピッチに立たせてくれて」
夏さんは涙をぬぐっていた。きっと姉として弟のことを思っての涙だった。
龍ちゃんも、蹴ちゃんが今日の試合に出てくれたから自分は日本に残りたい1つになったしこれまでのことも感謝していた。

「蹴司！　龍ちゃんたちが来ているよ！」
「!!」
　夏さんがそう言うと、すぐに反応して蹴ちゃんは重い足取りでやって来た。けど、龍ちゃんの口から高校からも日本に残ることを聞いた時は、表情一転して本当に嬉しそうだった。
「これからも一緒にサッカー出来る……」
「おう」
　龍ちゃんが1人日本に残ることを聞いたあとからだった。蹴ちゃんの喘息も少しずつだけど、ちょっとずつ良くなっていたらしい。それもあって私たちと蹴ちゃんを含め、引退して受験勉強の合間を縫って高校でもすぐにサッカー部の練習について行けるように宮崎の誘いで宮崎兄のフットサルサークルへお世話になることになった。

　龍くんが日本に残ることが決まってからだった。いいこと続きに僕の喘息も少し良くなってきたと先生の診断を受けて――
　――すこしずつ運動してもいいよ。
　それを聞いた時はやっと後ろめたい気持ちなしにサッカーが出来るんだと思い、その場で大きく喜んだ。

「ぷ――――」

それから数日が経った頃、僕はすごく不機嫌だ。そうアピールしている。

「ダメだよ、さっき思いっきりぶつかったでしょ」

隣にいた僕の監視役であるピッチから戻って来た優希ちゃんに止められるも、僕は諦めないよ。

「だって、大丈夫だもん！」

「それでもダメ、夏さんから渡されたマニュアル表に書いてある通りにしないといけないから」

そう言って表紙には〝蹴司の扱い方〟とお姉ちゃんの字で書かれてあった。何。それ？　僕の取説みたいじゃないか！

「僕は機械じゃないんだよ」

「そうは言ってもダメだよ。私、夏さんに頼まれているから」

僕の監視役はものすごくお堅かった。

今はフットサルコートでフットサルの試合をしていた。相手の大学生と僕たち宮崎くんのお兄さんのサークルグループで試合をしていたけど、僕は最初に1点を取った。だけどそれが向こうにしたら気に食わなかったみたいで無理やりタックルを、ボールを持ってないところで受けて交代を余儀なくされた。

「優希、試合なの」

僕たちがベンチで試合を見守っている時だった。いつもよく龍くんたちの試合に観戦に来て応援してくれるアンナちゃんとアンナちゃんのおじいさんがやって来た。

この試合、相手の大学生が僕たちのグループとダブルブッキングしたことで係りの人を引くほど責め立てたところをみんなが引き下がろうとしたけど、龍くんが試合をすればいいんじゃんっと言ったことから始まった試合だった。

「勝った方が残り時間コートをしよう。負けた方がコート使用料を持つって条件で戦ってるわけ」

「いいね！　燃えるじゃない！」

その説明を受けたアンナとおじいさん。おじいさんは何かをアンナちゃんに話していたけど……

「え？」

アンナちゃんは困った顔だった。後からアンナちゃんから聞いたらおじいさんが試合に出ると言ったらしい。今も固い体を柔軟で伸ばしているけど大丈夫なのかな……。

そんなことを思ってみている間に、相手の南芳大の人が得点を決められて４―１にリードを広げられた。

そしてそのすぐ後におじいさんはゲームに入ったけど……

『違う!!』

龍くんのパスに不満なのか怒鳴った。みんなびっくりしたけどアンナちゃん曰く、サッカーの本質を教えよう！　と言ったらしい。

一体本質とは何だろうと思い、おじいさんの動きを見た。

「！　とっ……」

とても強いパスを出したおじいさんはすぐにボールを受ける動きをしていた。龍くんはスペースに出したけど通じなかった。やっぱりダメかと思った僕たちだったが、その後だった。インプレー中にもかかわらずおじいさんは龍くんの腕を取って何かを説明しようとした。

「た、タイムアウト要求！　タイム！」

なんとか宮崎のお兄さんがプレーを切ってくれたこともあって一度タイムアウトが取られた。

「わざわざプレーを難しくする必要はないってさ」

「え？」

あのあと、アンナちゃんの通訳でおじいさんの真意が聞けた。サッカーの本質は、止める・蹴る・動くの３つで至ってシンプルだということを。そして、最後にパスは速くて強くだと伝えて１分間のタイムアウトは終わって再開された。

龍くんは言われた通りにおじいさんへ速くて強いパスを出した。それをおじいさんはいとも簡単に止めると、最後も龍くんと同じように優人くんへ速いパスでラストパスを送った。

「ど、どんだけ高いレベルのパス回しだよ!?」

おじいさんと代わった宮崎くんが言うように、速いパス回しで一気にゴール前にいた優人くんの許に行ったけど、優人くんはトラップミスで最後は何とかシュートに運ぶのがやっとでゴールとはならなかった。でも、あの場面しっかりと優人くんがトラップ出来たら完全な決定機だ。

「そうか！　僕おじいさんと代わる！」

「え？　だ、ダメ！　まだ――」

「呼吸が落ち着いたら大丈夫ってノートに書いてあったよ」

「い、いつの間に……」

僕はすぐに交代できるように準備して交代した。

あの後、ミルコは代わってベンチに戻ってきたがやはり激しい運動はきつかったのか額に汗が落ち、息が荒かった。

「ふぅ――さすがに堪える……」
「おじいちゃんうまーい！　凄かったんだね！」
「少年は気付いてくれただろうか……いかに自分が独りよがりなプレーを続けてきたかを……」
　それを聞いた孫のアンナは龍のどこかが独りよがりなのかを聞く。思い当たる節がなかったから。
「チームのすべてを背負い込もうとすることが……だ」
　そして、ミルコは鎖の強さの話をした。鎖とはチーム、輪は選手にたとえて強靭な輪が頑張ろうと、鎖は弱いところで切れる。その認識が甘いとミルコは考える。
「何よ！　龍の頑張りが無駄だったってこと!?」
　アンナにそう言われ、ミルコはそんなことはない。が、龍が自身と同等以上のチームメイトを持った経験がないのだがそのためで肌感じることもままならなかったのだろうと。サッカーの本質を。
　現代サッカーは時間とスペースを削り取る方向に向かっている。その中でもフットサルのスペースで養うのはいいとミルコは思い、ダイレクトパスやスペースのチャレンジするパス、失敗はつきものだが、足元へのパスは成功率１００％決めないといけなかった。基礎なだけに。

ミルコは常々。日本人の技術の捉え方がヨーロッパの経験のある自分から見て間違っていると思っていた。華麗なフェイントやスルーパス以前にショートパスの能力が低ければ、ゲームをコントロールすることは困難であることを。

「だが、龍は幸運にもあの少年がいた」

あの少年とは、蹴司のことだった。

「あの少年が、喘息でありながらもボールを使った練習を1人でやってきたこと。まったくもって無駄じゃなかったよ」

そう話した時だった。蹴司は龍から早いパスをゴール近くで受ける。

（このパスだったら、相手の寄せも遅い！）

この速いパスで自由になれる。でも、1人じゃできない。みんなが必要なんだ。

「よぉし！」

その後、蹴司たちのチームが1―4から怒涛のゴールラッシュで6―4の勝利をものにした。

「じいさん……」

龍はベンチに座っていたミルコに親指を立ててグッドサインをした。しっかりと伝わっていた。

ミルコもこれで気兼ねなくヨーロッパに発つことが出来るとつぶやくのだった。

それからも受験勉強をしつつ合間を縫ってフットサルで足元を磨き迎えた４月――

――蹴司たちは高校生になった。

「お姉ちゃん！　僕は龍くんたちと一緒に行くから」

真新しい私立・武蒼高校の制服を身にまとって。

「こらぁ、蹴司！　お父さんに挨拶していきなさい！」

姉・夏にそう言われて、急いで蹴司は父のお仏壇の前に正座で座り拝んだ。

――お父さん、僕は今日からお父さんがいたサッカー部へ入ります。

神崎蹴司、新たなスタート地点に立つことが出来るのであった。